

令和6年度 霞ヶ浦学講座「中世の霞ヶ浦」実施報告

実施日時：令和7年2月8日（土）13:30—15:00

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：比毛君男 氏（上高津貝塚ふるさと関市の広場 副館長） 参加者数：41名

テーマ：「中世の霞ヶ浦」

講演概要

霞ヶ浦は、奈良時代の頃は「流海」と呼ばれたように、時代とともに名称（呼称）がかわってきました。また、海の入江から次第に湖へと変化してきました。

本講座では、奈良時代に編纂された常陸国風土記をはじめとし、古代から中世にかけての古記録・古文書、考古資料をもとに中世の霞ヶ浦の姿を探りました。

古代から中世にかけての古記録や古文書では、霞ヶ浦は「海」と記載され、江戸時代後半の記録では西側が湖、東側が海と記されています。また、また、筑波山塊の変成岩や銚子の堆積岩が霞ヶ浦を介して石造物の材料として広範囲に使用されていたことなどから、内陸に広がる河川や陸路を通じて沿岸や周辺地域と結びついていたことがわかります。

【講師資料より】

古代から中世の古記録・古文書に見る霞ヶ浦

常陸国風土記（地誌 奈良時代、現存は常陸・出雲・播磨・豊後・肥前の5つ）

「信太郡」「茨城郡」「行方郡」などの記述の中で霞ヶ浦が「流海」と呼ばれていたことが記されています。

「信太郡」 「東は信太の流海、南は榎の浦の流海、西は毛野河、北は河内の郡也」

「茨城郡」 「東は香島の郡、南は佐我の流海、西は筑波山、北は那珂の郡也」

「行方郡」 「東・南・西は流海、北は茨城の郡也」

将門記（軍記物語 平安後期）

平将門の乱の詳細が記されています。平将門の進軍ルートに「渡りより常陸国信太郡エ崎津に着く」とあり、船による移動が示されています。これにより霞ヶ浦が内海であったと推測できます。

今昔物語集（説話集 平安末期）

平忠常が源頼信に攻められた際の記述に「～而るに、彼の忠常が栖は内海に遥に入たる向ひに有也」とあり、霞ヶ浦が「内海」と記されています。

霞ヶ浦を詠んだ和歌

霞ヶ浦を詠んだ和歌は多く存在しますが、ほとんど都人が都で詠んだものであり、実際に常陸に来て詠んだものは少ないと考えられます。

・『源三位頼政集』（歌集 平安時代）

「あまさかる うなかみかたを 見渡せば 霞にまかふ 信太の浮嶋」

潮来市長勝寺銅鐘の銘（長勝寺は、源頼朝創建と伝えられています。銅鐘は国指定文化財）
銅鐘に「客船夜泊 常陸蘇城」と刻まれています。当時の中国の繁栄都市・蘇州になぞえられており、潮来が交易などでにぎわっていたことがわかります。

神皇正統記（史書 南北朝時代）

北畠親房が漂着時の際の記述に「同じ風のまぎれに、東をさして常陸国なる内の海につきたる船はべりき」とあり、霞ヶ浦が「内の海」と呼ばれていることがわかります。

海夫注文（「香取大禰宜家文書」 鎌倉時代）

香取神宮の大禰宜が支配した海夫に関する文書でこの中では、下総国と常陸国に属する津（港）名と知行者名を列挙した文書になります。霞ヶ浦・北浦側で合計 53 か所、下総国側で 24 か所の津の記載がみられます。

鳥名木家文書（茨城県指定文化財 鎌倉時代）

この文書では、「商船々、若有海賊之者」とあり霞ヶ浦周辺での海賊行為と、関東管領によりその取り締まりが行われていたことが記されています。

文正草紙（御伽草子 室町時代）

鹿島神宮大宮司に仕えた者が「つのをかが磯（鹿嶋市角折）」で塩焼きとして財を成す出世物語で「常陸国に、塩焼きの文正と、申す者にてぞはんべりける」と記述されています。古代では霞ヶ浦内部で行われていた製塩は中世では鹿島灘沿岸で行われていました。

水府志料（地誌 江戸時代）

江戸幕府による諸国の地誌を提出する命をうけて編纂されました。「行方、新治の間にあるもの、是を西浦とよび、鹿島に臨める者、是を北浦といふ」と記述があり、霞ヶ浦を鹿島神宮から見た方向で、西浦・北浦と呼称を分けていたことがわかります。

利根川図誌（地誌 江戸時代）

牛堀（潮来市、旧牛堀町）の記述では、「霞が浦は至って渡り難き海」、波逆浦は「波逆海」、大船津の記述では、「鹿島の神の一の鳥居、海中にたてり」とあり、鹿嶋、潮来までは海と認識されていたと推察できます。

吉田麦翠（俳人）の句碑（安政年間に建立 阿見町阿見神社境内）

句碑に「湖の風も通うて夏木立」とあり、江戸時代末期に土浦入側では湖と認識されていたと推察できます。

考古学（考古資料）から中世の霞ヶ浦を考える

阿見町掛馬の大量埋蔵銭

阿見町掛馬で、埋蔵銭（中世期）が大量に発見されています。周辺には竹来阿弥神社
また中世には島津津があり、出土地点は遺跡などに囲まれており、霞ヶ浦の湖岸に面した地で活発な商行為が行われていたことがわかります。

石造物の利用と流通

- ・筑波平沢（等）産の雲母片岩製板碑

雲母片岩はつくば市平沢を中心に産出される変成岩で、縄文時代には石皿、古墳時代には石室、石棺材、奈良・平安時代には寺院の礎石として利用されていました。中世の頃には板碑（供養のための卒塔婆）に利用され、常陸から下総北部では、筑波南麓型の片岩を用いた板碑が分布しています。

- ・筑波山塊産の花崗岩製五輪塔

筑波山塊一帯で産出され、鎌倉時代後期西大寺系律宗の流行に伴い南都の工人が招請されて、五輪塔などの石造物が多く造営されました。

- ・銚子産の砂岩製石造物

砂岩は堆積岩であることから、軟質のため破損しやすい。15～16世紀に霞ヶ浦水系を通して五輪塔・宝篋印塔が千葉県北部から、茨城県の鹿行地域から県南の一部に普及しています。

これらのことから霞ヶ浦を介し、石材が流通していたことが推察できます。



(文責 小川)